

老舍『張自忠』試論

渡 辺 武 秀*

On Lao She's "Zhang Zi Zhong"

Takehide WATANABE*

概論

《張自忠》は一九四〇年老舍在重慶写的话剧作品。老舍已经发表了一九三九年的《残霧》、一九四〇年の《国家至上》两部话剧作品。所以、这部《張自忠》是老舍的第三部话剧作品。

这三部话剧都有着不一样的创作条件。这部《張自忠》就是受军界朋友的委托而写的。大家都知道、張自忠是一位中国国民党军队的将军、是国民英雄。所以、从这观点看、我们可以说、老舍从开始创作之前、就有责任写成一篇張自忠将军的英雄故事。

但是、我一看这部话剧、就觉得有点奇怪。这样的话剧也可谓英雄传吗？这个话剧里居然出现一个不可思议的人物。在话剧里他随便批评張自忠将军、有时甚至全面否定張自忠将军的战绩。如果作家要表现出張自忠将军的英雄性、不应该是这个人物吧？在舞台上表演这个人物也非常难吧？

这些说明什么呢？这些情况里面一定有重要的事情。从别的角度来看、就是作者即使有创作困难也想要这个人物登场。这就是说、这部分内容里肯定有作家要通过这个人物的台词、行为传达给观众的事情。

想到这儿、我就想在研究这部话剧时、通过这个人物来分析这部话剧。这样做的话、我肯定会找到作家在话剧里的主张和思想的一部分。

Keywords: Lao She, Zhang Zi Zhong, War

はじめに

老舍は、1938年、日本軍の武漢への進攻を避け、武漢から重慶に移った。これ以後、戦争終結の1945年まで重慶に住むことになる。ここ重慶でも老舍は文学創作を続けているが、この時期の創作活動に、重慶に来る以前とは違った変化が現れる。その一つとして話劇の執筆を始めることを挙げることができるだろう。この話劇創作の最初の成果が『残霧』（1939）であり、第

二作目が『国家至上』（1940）である。そして、今回この小論で取り上げるこの『張自忠』（1941）は、老舍話劇の第三作目となる。

筆者は『残霧』（1939）『国家至上』（1940）の二つの話劇作品についてはすでに考えたことがある^(註1)。この『張自忠』以前の作品は、創作動機、さらに登場人物の身分、そこに描かれている社会といったものは異なるが、みな、基本的には、老舍独特の表現の仕方、中国の民衆を悲惨な目に遭わせている日本軍の軍事行動への抵抗（「抗戦」）を観客に呼びかけるとい根本姿勢では共通している^(註2)。

こういったものも含め、この『張自忠』では

平成19年12月17日受理

* 基礎教育研究センター・教授

どうなのかということを考えてみたい。

したがって、今回のこの小論の目的は、これまでの考察に引き続き、この話劇を取り上げ、さらに、従前の二作品以後の、老舎の話劇創作での成果の展開を追って行く、ことである。

一

これまでの話劇がそうであったように^(註3)、この『張自忠』にも、執筆にまで至る特殊な背景があるように思う。ここのところを整理し、そこから、この作品をどのような方向で分析するのが最も効果的か、検討してみる。

この『張自忠』に関しては、老舎は「軍界の友人に頼まれて」^(註4)書いたと自ら述べている。何故こういう形の依頼になったのか。老舎はその経緯についてそれ以上詳しく述べていない。だが、当時の歴史的事件から推し測れば、この依頼に当時の特殊な事情があったことが充分考えられる。

張自忠は国民党の軍隊の將軍である。1937年の蘆溝橋事件以来、中国軍は日本とのたび重なる戦いで劣勢を強いられていた。この中にあって、ほとんど唯一の勝利を得たのが張自忠の率いる軍隊である^(註5)。この張自忠將軍は1940年5月に湖南省の漢水の付近、十里長山の南瓜店で戦死する。当時の政府は彼を国民的英雄として扱い、彼の遺体を重慶の北碚にまで運んで埋葬した^(註6)。「軍界の友人」からの、老舎への『張自忠』の執筆依頼は、まさに張自忠將軍が戦死して間もない頃に行われたと考えられる。

このような張自忠の戦功、また当時の政府の彼の戦死の扱い方、執筆依頼の時期からして、この作品は、最初から、明らかに「抗戦意識の高揚」を宣伝し、張自忠を「英雄として描き出す」ことが求められていたのである。

この作品は、『老舎年譜』（張桂興編撰・上海文芸出版社）によると、何度かの修正が加えられ、1941年1月に雑誌『中蘇文化』に発表されているが、この作品をそのようなものとして一

読すると、軽い違和感を覚えてしまう。

この作品は所謂「張自忠の英雄伝」であるはずにもかかわらず、この作品には、張自忠を敵視する人物が登場している。墨子庄という人物である。物語の中で、彼は、繰り返し、張自忠を激しく批判し、時には張自忠の功績を全面否定する。なぜこのような人物が作品の中に登場しているのか。このことが張自忠を「英雄に描く」ということにどのように繋がっているのか。

今回、この辺りから斬り込んでゆくのが、この作品を理解するのに最も有効であると思われる。

二

実は、墨子庄のような人物は、従前の話劇『残霧』（1939）『国家至上』（1940）にも登場している。これらの二つの作品のこの点を簡単に紹介してみよう。

まず二つの作品に見られる共通点を簡単に整理すると、以下になるだろう。

例えば、中国人民の中には、日本軍と戦っている状況の中で、日本軍の侵略に徹底的に抵抗している人物たちがおり、逆に一方では日本軍の侵略に協力する人々もいる。この時、後者に関わる人物、或いはその人物の行動、また或いはこれからもたらされる結果を、一括して「影の部分」と呼んでおくことにする。そして、そういうものを「影の部分」とすれば、共通点として、これらが従前の『残霧』『国家至上』に巧みに描き込まれているといえるのである。

『残霧』はどうか。

『残霧』は政府高官の諷刺と抗戦意識の高揚を巧みに織り込んだ作品であり、「影の部分」に関わるのは、楊夫婦と徐芳蜜である。この劇で、これらの人物たちは、有能な官僚である主人公の洗局長に近づき、ついには彼を自分の側に引きずり込んで違法な行為を行わせる、という役割を果たす。「影の部分」の使い方も工夫されている。この作品では、最初は楊夫婦がとんでもな

い狡賢い人物のように見える。ところが、後に、実際には背後に美人で、楊夫婦より更に頭の切れる、もっと凄い悪人の、日本軍のスパイと考えられる徐芳蜜がいたということが判明する。このような物語の展開となっている。最後は、洗局長は売国奴の罪で銃殺され、徐芳蜜はうまく罪を逃れ社会に生き残る^(註7)。

では『国家至上』はどうか。

第二作の『国家至上』は回族救国協会に依頼されて書いたものである。テーマは「回漢團結、共同抗戦」となっている。ストーリーは、ある回教の村の内部の対立——あるグループは漢族と協力して抗日を行う（漢回共同抗戦）、他のグループは回族だけで日本軍と戦うと主張する（回族単独抗戦）——が起こるという設定で展開して行く。いくら回族が勇猛であれ、単独で戦えば日本軍が有利になることは眼に見えている。だが、一方では根強い民族間の対立がある。紆余曲折の結果、この二つのグループの対立がやがて解消し、最後に全員が一致協力して抗戦に向かうところで幕となる。この作品で「影の部分」に関わっているのが、金四把という登場人物である。この人物が背後で二つのグループの対立を煽っている。この人物の描き方も巧みである。最初は大人しく、みんなに友好的で、人からは可愛がられる人物として登場する。ところが、正体がはっきりしてみると、驚いたことに、この人物は、実際は、なんと、二つの対立する勢力に巧みに入り込み、グループ間の対立を激化させるように誘導し、日本軍が有利になるように仕組んでいたのである^(註8)。

これから分かるように、従来の二つの作品は、「影の部分」を巧みに取り入れることで、事件の重大さ、問題の深刻さ、怖さ、そしてさらには人間が本来持っている、容易に陥りやすい弱点というものを浮かび上がらせていた、ということが出来る。

三

今回取り上げる『張自忠』にも「影の部分」がある。この部分に関わるのが、墨子庄という人物なのである。

この作品の冒頭には、従前の二つの作品には見られなかった「演出家のために書く」という文章が掲げられている^(註9)。この中で、作者は墨子庄という登場人物に言及している。その部分を引用する。

抗戦開始の頃、多くの誤解が張將軍を黒い影として遮っていた。ここには確かに「劇」がある。しかし私は敢えてそれを用いなかった。私はこの黒い影を墨子庄先生に変化させ、そこに練り込めた。だからこのところはフィクションであって、事実ではない。こういうことで、墨先生この人と、彼が代表する一切のものは、あってもなくて良いみたいなものである^(註10)。

墨子庄という人物は実在の人物でなく、全くのフィクションである、と作者は述べている。

また、作者は、別の箇所でも墨子庄について言及している。

各「幕」について解説した後、それぞれの「幕」のバランス、「幕」と「幕」の繋がり具合等について述べた後に、以下の言葉が続いている。

私はただ第一、二の両幕に少なからず墨先生の劇があり、それが全劇を不安定にしていると感じている。しかも、第二幕中に、側面から臨沂の戦いと撤退援護の任務を書いたことで、弱々しく力がない嫌いがある。第二幕をこんなふうにしたことによって、著者は結局何をしようとしているのか、人に分からないようにさせている。しかし、私は再び改める方法を持ってない。墨先生を捨ててしまえば、必ず一つの戦争——臨沂の戦いと撤退援護の任務——或いは問題——友軍に関わ

る連絡或いはある困難——で以て代替しなければならなくなる。戦争を用いれば、第四幕とそっくりになってしまうし、問題を使えば、激しい反感を惹起しやすい。気兼ねと単調さの回避が、余り歩きやすすくない道を選ばせ、しかも労多く成果が乏しい、無闇やたらな走りをさせることになった^(註11)。

ここで作者が問題にしているのは、第二幕に墨子庄を作品に入れたことと、徐州撤退援護の任務の描き方についてである。

このうち、なぜ敢えて墨子庄を登場させたかについては、このことで作品が単調になってしまうことを防ごうとした、と述べている。作者が指摘するように、確かに、墨子庄が登場しなければ、戦いのみの単調な作品になってしまった可能性も否めない。

これに関しては、この文章にこれ以上の説明を見出せないし、もちろん、この記述で、墨子庄がこの作品に出てくる理由として十分に納得できる。だが、やはりそれでは、依然として、墨子庄を登場させることで、作者が何を表現したかったのか、については不明のままである。

また、作者は、別の文章で、この作品を五回も書き直したと言っている^(註12)。作者がこの作品を創作するのに相当苦勞している様子が窺われる。この苦勞は、墨子庄というフィクションの人物を登場させていることにも、大いに関係していると考えられる。それまでして、作者がこの墨子庄を作品に登場させることに執着しているということである。なぜか。それは、作者に、この人物を通して観客に特に伝えたい何かがあったからではないか。こう考えるのもあながち的はずれではないだろう。

こうして、書き上げられた作品は、どうであったか。これについて、作者自らは「失敗だった」と述べている^(註13)。だが、作者はまた、どこが失敗なのかについては具体的に述べてはいない。

四

この『張自忠』の分析に入る前に、まず、この作品には自明の大前提があることを確認しておきたい。

作者はこの劇を書くに当たって張自忠を「英雄を描いて欲しい」という依頼を受けているが、同時に、作者が書く以前に、社会にすでに張自忠は「英雄である」というイメージも存在していると考えられる。だから、この劇での、張自忠の「抗戦」をはじめとする、彼の言動、行動は絶対的な「是」の範疇に入っていると考えべきであろう。この大前提の上に、この作品は最初から乗っているのである。

この劇は墨子庄の次の台詞から始まる。

墨子庄 占元。

栗占元 はい。

墨子庄 王高級参謀は病気なのだな？

栗占元 そうであります。

墨子庄 彼に伝えてくれ、昔馴染みの墨子庄さんが見舞いに来られており、いつ都合が宜しいか、お尋ねになっていします、と。

栗宣言 はい。(退場)^(註14)

栗占元は軍隊の高官の当番兵であるが、墨子庄はすでに栗占元を自分の部下ように扱い、あたかも嘗て軍隊で、或いは社会的に高い地位に就いたことのあるような、相当偉ぶった態度で舞台に登場している。また、この墨子庄は政府中央の動きにも精通し、そこにたくさんの人脈を持っているかのような態度や話し方もする。

墨子庄 彼は北平、天津で騒ぎを起こしたのではなかったか。現在国内に彼を高く買うような人間はいるものか。中央が彼をまた派遣するだって！ 冗談じゃない^(註15)。

ここで言う「彼」とは張自忠のことを指す。こ

の作品では、張自忠は「第一幕」の前半には登場せず、人の話の中で語られるだけである。

この台詞から、すぐに、墨子庄は張自忠を批判する側に立っていることが見て取れる。ここで墨子庄の言う「北平、天津での騒ぎ」とは、具体的には「廊坊事件」を指しているように思われる^(註16)。ただ、この小論では、この事件を史実に基づいて実物の張自忠について云々するつもりはない。少なくとも、ここでは、墨子庄は、張自忠と全く違う主張を持つということを知るだけで充分であると考え。

墨子庄がこのような人物とすれば、逆に張自忠を擁護し、さらには賛美する人物もいる。洪進田という人物がその一人である。

前掲の墨子庄の台詞に続く洪進田の部分を見てみよう。

洪進田 老先生あなたは事情の表面から一人の人物を[見て]（注、原文に台詞を強調する記号が付けられている。この記号は以下の台詞も同じとする。）おられるのですし、我々は心の中から一人の人物を信服しているのです。我々は、中央は必ず彼を戻すだろうと信じています。彼がもし帰ってこなかったら、私は山東に行ってゲリラ攻撃をします^(註17)。

墨子庄が張自忠のことを批判すればするほど洪進田を含めた張自忠の部下がますます反論する。こうなれば、却って、洪進田たちの張自忠に対する尊敬の気持ちがはっきり表れてくる。この結果、張自忠と自分の部下たちとの絆がいかに深いものであるかも分かるのである。そして、この事実、まさに張自忠の偉大さを示すことにもなっているのである。

この展開をもう少し追ってみる。

洪進田 言っておきます、もしあなたが張將軍を失脚でもさせたら、私は容赦せずに

墨子庄 ワシが彼を失脚させてどうするんだ。ワシが言っているのは、中央が彼を許すはずがないということであって、ワシとは全く関係ない。彼がもし帰ってくるのができたとしても、お前とワシは特に責任を負わなければならない。ここの軍人たちを守るのだ！

洪進田 ここの軍人を守る、ですって？ どういうことか分かりません。

墨子庄（洪に近づき、丁重に）私たちは日本にはかなわない。お前に次の言葉を告げよう、しっかり考えなさい。「賢明な人は巧みに身を処し自己の地位を保ち、別に道を開く」ということだ^(註18)。

墨子庄は「ここの軍人を守る」と言っている。しかも、洪進田もこれに協力すべきだとまで言っている。だが、洪進田は、この「軍人を守る」の意味が分からないようなのである。

このような、掴みにくい、「おや」と思わせる墨子庄の台詞の存在がこの作品の特徴の一つであろう。もちろん観客も聞いてすぐには理解できないと思われる。墨子庄の話に独特の論理の展開が持ち込まれているからである。そこで、ここで、あらかじめ、この墨子庄の論の展開のパターンを明らかにしておこうと思う。もともとこれは墨子庄の話を聞いて少しずつ理解できて行くことが想定されるものだが、この話劇を分析して行くという目的のためにそれが必要だと思うからである。

まず、最初に押さえておかねばならないのは、現在も、これから、墨子庄が述べるあらゆる論は「中国軍は日本軍には絶対かなわない」を根拠にしている、ということである。だから、さらに一歩進めて、墨子庄は「日本軍に絶対かなわない」から、もし「日本軍と戦えば必ず死ぬ」と考えている。また、だから「日本軍と戦ってはいけない」と主張する。

例えば、前掲の墨子庄の台詞に「（部下に対する）責任を負う」とか「軍人を守る」があるが、

この言葉は、実は、張自忠軍の軍人に「日本軍と戦わない」ように勧め、或いは「日本軍と戦ってはいけない」ことを知らせるということであり、このことをすることが「責任を果たし」「軍人を守る」なのである。

墨子庄の主張は、表面では立派なことのように見えながら、実は、裏を返すと、日本軍の侵略に協力することであり、同時に、日本軍の侵略によってもたらされるであろう庶民の悲惨さを無視する利己的なものであると解釈することができる。

この劇には、墨子庄のこのような台詞が散りばめられている。

墨子庄 たとえ戦うにしても、戦い方というものがある。敵を知り己を知っていれば百戦百勝する。ワシは日本に行ったことがあるから日本の軍隊がどんなものかよく知っている。蓋世も日本に行ったことがあるので、当然日本のことを知っている。だから、つまりだな、たとえ彼が帰ってきてても、もう少し考えるべきなのだ。まして彼はいまだに帰ってくることができない。また、ワシが幾つか年上で、ワシには身分や地位もある。君たちが人に犠牲にさせられるのを見るに忍びない。だから、ワシは君たちに会いに来た。一片の真心と善意からなのだ^(註19)。

因みに「蓋世」は張自忠の「字」である。文人同士の付き合いで、「字」を使う方が礼儀正しいのである。ここで墨子庄が「字」を使っているのは、文人的素養をひけらかしていると理解したい。中国には、もともと文人が武人よりランクが高いという伝統的な考え方がある。

すでに述べたように、この場面の墨子庄の台詞の「敵を知り己を知っていれば百戦百勝する」とか「君たちが人に犠牲にさせられるのを見るに忍びない」とか「一片の真心と善意なのだ」という言葉は、実は、「中国軍は日本軍には絶対に

負ける」「中国軍は日本軍に勝てるはずがない」だから「日本軍と戦ってはいけない」「日本軍との戦いを止めさせよう」という論拠に基づいて発せられたものである。

したがって、この方向から読み取れば、墨子庄の台詞は、以下のように解釈できるだろう。

墨子庄は「己を知り相手を知れば百戦百勝する」と言っている。まず「己を知り相手を知る」というのは、「日本人」「中国人」のことを自分はよく知っているという意味であり、「百戦百勝」とは、日本人と駆け引きをし、日本人を利用し、利益を上げ、自分はいつも勝利することができるといふことである。つまり、墨子庄はこのように日本人と友好的につき合うほうが、日本軍と戦うより遙かに現実的で、理に適っていると述べている。

また、墨子庄が「君たちが人に犠牲にさせられるのを見るに忍びない」と言うのは、張自忠が自分の利益のために、「君たち」に「死ぬ」と分かっている戦いを強要しており、「君たち」は「張自忠の主張の犠牲になる」のだ。自分はこのことを知っているから、君たちが日本軍と戦っているのも「見るに忍びない」、だから君たちに「一片の真心と善意」で「日本軍と戦わない」という「助言」しているのだと言っている。

墨子庄は傍若無人に張自忠を批判する。発言内容は、しだいにエスカレートし張自忠を極悪人にまでしてしまう。

実際に日本軍と戦っている人々や、直接の被害者は別として、このような劇の作家が、誰にでも納得できるような形で「日本軍と戦う」ことの正当性を述べることは簡単ではない。さらに、人々に「日本軍と戦う」ことを決心させることは、またさらに難しい。

庶民の多くは、できるなら「日本軍と戦いたくない」「戦うのは怖い」と考えるに違いない。そして「戦いたくない」を正当化するために様々な理由を持ち出すだろう。このような人々をどのようにすれば「戦う」という気持ちにさせられるのか。

物語の展開から言えば、主人公の張自忠は、墨子庄の主張を論破し、「戦いたくない」「戦えば必ず死ぬ」の気持ちを「戦う」「死ぬことを怖れない」に変えねばならないのである。この説得を、この劇のすべての観客が心から納得する形で行わなければならない。もしこれができなければ、この劇は一文の価値もないのである。

こういった部分に、作者が、自分の方法で、挑んでいると考えて良いだろう。

五

この作品は「幕」とは別の角度から物語を区切ることができる。一つの幕に、次のパターンが存在している。

① 墨子庄と張自忠以外の者の対決、

② 墨子庄と張自忠の直接対決

このパターンが「第一幕」「第二幕」でそれぞれ繰り返される。

物語は、最初、張自忠は登場せず、墨子庄が一方的に張自忠を批判し、これに張自忠の部下の洪進田らが反論するという型で進行する。そして、墨子庄の弁舌が最高潮に達した時に、張自忠が登場することになる。

墨子庄は何かにつけ「張自忠は帰って来られない」と言っていた。張自忠の部下はこれを聞き、絶望していた。だが、そうではなかった。軍隊の人々は歓喜する。ここからが②ということになる。ここに「墨子庄と張自忠との直接対決」が始まる。

墨子庄 蓋忱、ワシはわざわざお前に会いに来たんだぞ。

張自忠 （顔色がだんだん険しくなる）誰の考えなのだ、彼をここに留めたのは？

尤師長 （立ち上がって）私です。

張自忠 尤師長、どういう理由からだ？

尤師長 彼はあのように歳を取っていますし、またみんなの友人でもありますので、ひどいことできないと思ひまして。

張自忠 ああ！（註20）

張自忠は、「ああ！」とひどくビックリした。何故このように驚いたのか。

張自忠は、尤師長がすっかり墨子庄の術中にはまっていることに気がついたのだ、と解釈したい。

墨子庄のような人物が軍隊の結束という点で如何に危険であるか。彼のような人物が何故容易に軍の中に入り込むことができたのか。このままだと、彼が軍人、軍隊そのものを、あつという間に、汚染して、駄目にして行く。この「ああ！」は、張自忠の、これらの思いがすべて入っていると解釈したい。

墨子庄 蓋忱、ワシは真心からお前に会いに来たのだ。

張自忠 洪団長、彼は私が帰ってくることができないと宣伝したのではないか。

洪進田 そのとおりです。

張自忠 墨先生、どうぞ続けてお話し下さい。

墨子庄 蓋忱、ワシにはお前に話したい大事なことがあるのだ。ワシは、確かにお前はたぶん帰って来られないだろうと言った。それは——単にワシの情報があまり役に立たなかったということだけであって、他の意味は無い、絶対に無い。

張自忠 でしたら、もう他に話すことはありませんね。（みんなに向かって）彼は他に何か言ったか？

範参謀 彼は司令官が戦うのか、それとも戦わないのかを知りたがっていました。

張自忠 おお、洪進田、彼を拘束しろ！

墨子庄 ええ？どうなっているんだ？蓋忱、ワシはお前によかれと思ってなのだ。この軍人たちによかれと思ってなのだ！

張自忠 彼を拘束しなさい！

洪進田 （近寄って）墨先生！

墨子庄 分かった！分かった！分かった！（註21）

墨子庄が犯罪者であれば別だが、「拘束」というのは、いささか乱暴な処置のようにも見える。

何故こうなったか。ストーリーの展開から考えれば、墨子庄が「張自忠がこの軍隊に帰って来られないと言いつらしていた」、「張自忠が戦うかそれとも戦わないか知りたがっていた」からであるということになる。だが、それでも、ここでは、張自忠が、何故墨子庄を拘束したのか、は依然として不明のまま残されるのである。

ただ、ここで、はっきりしているのは、結果として、張自忠は一瞬にして墨子庄を押さえつけてしまい、墨子庄は張自忠の許しがなければ、この張自忠の軍隊から出て行くことができなくなった、ということである。

六

「第二幕」には所謂「臨沂の戦い」^(註22)が描き出されている。この「幕」では戦争そのものは直接描かれていない。新聞記者が張自忠軍の将校や張自忠自身にインタビューするという形式を用いて「臨沂の戦い」を描き出すというスタイルを取っている。インタビューしている現在は「徐州の攻防」^(註23)であり、ここでの話題が「臨沂の戦い」なのである。

また、第二幕でも、第一幕と同様の、すでに挙げた、以下の二つのパターンがある。

- ① 墨子庄と張自忠以外の者の対決、
 - ② 墨子庄と張自忠の直接対決
- このうちまず①の部分を見てゆく。

この場面で、新聞記者の楊柳青という青年が、洪進田に「臨沂の戦いの意義はどこにあるのですか」と質問している。すると、洪進田の傍らに居た墨子庄も口を出す。ここに墨子庄の、張自忠への批判が始まることになる。

墨子庄 意義？意義だって？人殺し！人殺し！人殺しだ！人殺しという以外に何の意義があるというのか？この悪魔たちメが！ここの連中は人を殺して瞬きもしない！

楊柳青（墨先生の意味を誤解して）そうなんです。先生、日本人こそまさしく悪魔ですし、人を殺して瞬きもしない連中なんです。ですから私たちは——

墨子庄 ワシが言っているのは張自忠、そして（洪を指して）あいつらのことだ。朝から晩まで兵隊たちを引き連れ彼らを死に追いやっている。ワシでさえ危うく大砲で粉々にされるところだった。何でだ？教えてくれ、楊先生、君は公平な立場の人なんだろう。何でワシがここで「見せしめの刑」にされなくちゃいけないのか？法律にこんな一条があるのか？教えてくれないか^(註24)。

墨子庄は平和主義者で、戦争そのものを批判しているようにもみえる。また、「戦う」ことは「人を殺して何の感情も起こさない」悪魔的行為に他ならないと言っているようである。この部分だけだと墨子庄の指摘は正しいかのように思われる。

墨子庄の批判に正面から反論する方法はある。例えば、楊柳青の台詞のように「日本軍こそが悪魔である」とする主張である。日本軍を「悪魔」とし、この日本軍に対する「戦い」を「悪魔」に対抗する「抵抗の戦い」であると位置づけるのである。こうすれば、中国側の「戦い」には正当性が出てくるだろう。

だが、墨子庄の場合はもともとの言葉の意味がまるで違う。墨子庄は、決して戦争行為そのものを批判しているのではなく、寧ろ張自忠や彼に従う将校たちを批判し、張自忠らが一貫して「日本軍と戦う」ことを止めないのを批判しているのである。

しかも、墨子庄は、日本軍が中国人民を殺している事実には触れず、「人を殺す」という言葉で、張自忠こそが自分の部下の兵士たちを殺している張本人だと批判しているのである。

墨子庄はもともと「日本軍は強い、中国軍は必ず負ける」という揺るぎない考え方を持って

いる。だから、墨子庄からすれば、中国の人々は「日本軍と絶対に戦ってはいけない」し、日本軍と「戦えば」、中国人民は「必ず死ぬ」のである。

ところが、張自忠はあくまで「戦い」続ける。中国軍は戦えば必ず死ぬのだから、張自忠が自分の部下を死に追いやっているようなもので、自分の軍の兵士を自ら「殺している」のと同じではないか。しかも、「戦う」際に、張自忠は「部下が可哀想だ」とか「戦うべきではない」などの迷いもない。「戦う」ことに何の動揺もない。だから、墨子庄は、張自忠は「悪魔」みたいな人物だと批判しているのである。

一方、この墨子庄には弱点がある。張自忠の軍隊にいて「死の恐怖」に震えることになるのである。

墨子庄は「日本軍と戦えば中国軍は必ず負ける」と信じ切っている。なのに、張自忠はあくまで日本軍と戦い続けている。だから、自分も張自忠の軍隊にいれば近い将来間違いなく死ぬことになる。張自忠軍に居ること自体が「死」と隣り合わせなのである。ここにいる限り、毎日恐怖に震えていることになる。だからとにかく一刻も早く、ここを出て行かねばならないのである。

だが、張自忠が墨子庄のような人物を簡単に、無条件で解放するとは考えにくい。やがて、台詞の中に、張自忠が墨子庄を解放する条件が現れ始める。

墨子庄 金儲けをするのだ！馬鹿なやつだ。金儲けをせず、いつも張自忠の傍にいたら砲弾を食らうぞ。お前は自分に申し訳が立つのか。先にお前の子どもや妻を持ち出すまでもないだろう。

洪進田 ほんとうだ。楊先生、前線に出て、いつも私、この洪の後にくっついていれば、遅かれ早かれ死んでしまうことになります。どうして——

墨子庄 （ため息をつき）金満家の子どもは、屋

根の底の下には座らないものだ。これは書物上の話だから、お前なんかには分かるまい！どんなふうであれ、どのみちワシは自分の子どもをここに送り込んで大砲の灰にすることはできない^(註25)。

墨子庄は洪進田に張自忠の軍隊を去ることを勧めている。「金儲けをしろ」というのは、「戦う」のをやめて、むしろ日本軍と取引をしろということである。

ここに新しい展開が示される。張自忠が、墨子庄を「解放する」代わりに、墨子庄の息子をこの軍隊に連れてきて入隊させることを条件にしていることが明らかにされる。ただ、張自忠が何故このような条件を出しているのかについては、ここでは不明のままである。

墨子庄は、お金持ちの坊ちゃんは、突然瓦が落ちてくるかもしれないから家の軒下にさえ座らせないのだと拒絶する。ここには中国の、軍隊に対する伝統的な考え方が見え隠れしている。もともと兵隊になる連中は、社会で食えなくなった貧乏人と相場が決まっていた。お金持ちの坊ちゃんが兵隊になるなんてとても考えられない。この「伝統的な考え」から、張自忠の条件にとんでもないことだと反発しているのである。

墨子庄 お前たちが日本軍を打ち負かせるとても？冗談にもほどがある！

洪進田 （怒って、立つ）あなたは自分の目で私たちが臨沂で日本の兵隊の奴らを打ち破ったのを見なかったんですか。あなたは心根が悪いんで、目も見えなくなったんですよ。

墨子庄 百回負け戦をして、やっと一回だけ勝っただけのことで、屁の突っ張りにもならん^(註26)。

墨子庄は、中国軍は絶対に日本軍に勝てないと考えているが、ちゃんと張自忠軍は日本軍に

勝利したではないか。しかも、自分の目で見たではないか。洪進田は、このように詰め寄っているのである。

だが、この臨沂の戦いの勝利は、墨子庄には何の感動も与えてない。

同じ軍隊にいれば、知り合いもでき、親しくもなる。それらの友人たちが必死に戦う姿を「自分の目で」見て、或いは戦場で傷つく光景を目の当たりにし、日本軍に対する憎しみも生まれ、自分も「日本軍と戦おう」という気持ちになるのだろう。だが、墨子庄には、これが全くない。むしろ、墨子庄の考えは、中国の最後の勝利の光景を見るに至っても、なお変わらないようなふうにさえ思えてくる。

これに対する新聞記者の楊柳青の反論が以下の台詞である。楊柳青は、洪進田が墨子庄の言葉に我慢しきれず墨子庄を殴ろうとしたのを制止して、次のように言う。

楊柳青 待ってください。これこそが臨沂の戦いの一つの意義なのです。我々は勝ち始めたのです。今すぐ書いておきましょう！一回目の勝利があればこそ、二回目の勝利があつて、最後の勝利があるのだと！臨沂の勝利があつたから、台児荘の大勝利があつたのです。(洪は依然として墨を怒った目で見る)

墨子庄 そんなに怒るな！ワシの言ったことが全部本当だったから、一言一言がお前の心に突き刺さったのだろう。ええどうなんだ。やっとのことで、小さな勝ちをおさめ、それでもうお前たちが日本軍を[みんな] 追い出すことができると考えているのだったら、それはとんでもないぞ。また、こんなちっぽけな勝利を挙げたことで、天津でやらかした、人に顔むけできない出来事を覆い隠したと思うなよ。ふーん、ワシはしっかり覚えているぞ。永久に忘れんからな^(註27)。

新聞記者の楊柳青と墨子庄の「臨沂の戦い」に対する評価はまるで違う。

洪進田は侮辱されているのだから激しく怒る。だが、墨子庄は、洪進田の怒り、楊柳青の反論にも平気であり、彼らの怒りや反論を笑ってさえいる。もし、墨子庄がこの張自忠の軍隊に拘束されているのでなければ、他の場所で、こんな調子でものを考え、ものを言って、安全に、悠々と、日本軍と戦っている人々を馬鹿にして生活しているに違いない。

ところが、張自忠の命令で、墨子庄は軍隊の中に拘束されてしまった。この張自忠の軍隊にいれば、遅かれ早かれ、日本軍からもっと激しく攻撃され、張自忠たちと運命をともにするかもしれない。

墨子庄 師長、ワシは本当に耐えられない。ワシのためにひとつ取りなしてくれないか！そしてワシを放してくれ！

尤師長 あなたの息子を送り込んでさえもらえばそれで良いんですよ。(座る)

墨子庄 ああ！ワシはお前に何度も言っているだろう、[ワシ]の息子は兵隊にできないんだ。

尤師長 だったらまさか我々が、人が生んで、親が育てたのではないというのではないでしょうな。人が戦っているのにあなたの方は機会に乗じてお金を儲ける。人が血を流しているのに、あなたの息子は家で若旦那をやっている。うまい汁はみなあなたが吸っていることになります。巧い具合に、司令官が、あなたに自分の目で我々がどんなふうに戦っているかを見させ、その後であなたの息子を従軍させるといった方法を思い着いたのです。あなたの息子が軍隊の中にいれば、恐らくあなたはいくらか軍事に関心を持つでしょう。この意味を今日になっても、どうも、まだ理解されていないようですね。

墨子庄 ああ！ワシは[心]を掘り出して、お

前たちに見せたいぐらいだ。お前たちにも「ワシ」が分かっているんだ。ワシの長男は天津の吉美洋行（注：外国人の経営する商社）買弁（注：外国商人が貿易の仲介人として雇った中国人）をしているのだ。次男は……（註28）

この台詞のやり取りの中で、尤師長の口から、張自忠がなぜ墨子庄を軍の中に拘束し、息子を自分の軍隊に入れるように要求しているのか、少し明らかにされている。

一方に、必死で日本軍と戦っている人々がいる。その一方で、戦いとは全く関係なく生きている人々がいる。後者は「戦い」に利益があると見れば、軍隊に近づき、利益がないと分かれば逃げ出して行く。彼らは傷つくこともなく、「戦い」とは全く関係のないところで生きている。墨子庄は後者の代表なのである。そもそも墨子庄は、抗戦なんてどうでも良いのである。逃げ出せば、張自忠がどんなことを主張しようが、中国の人々が実際に日本軍と戦おうが、知ったことではないだろう。

こういう人物を法律で罰することはできないが、日本軍との戦いで命を失う兵士たちを見ると、このような人物を許すことができない。少なくとも、抵抗の戦いの意味が分かるまで、許すつもりもないのである。そうでなければ、この戦いのために命を捨てる兵士が浮かばれない。これが張自忠なのである。

墨子庄も真から自分の考えが正しいと思いこんでいるし、それ以外の考え方があることを理解できない。だが、どのようなであれ、とにかく、墨子庄がここを離れることができるのは、抗戦の意味を理解したという証拠を張自忠が確認できた時だけである。

果たして最終的に墨子庄にこれができるか。観客の先の関心はここにある。

七

張自忠の部下を初めとする人々が、どうしても考え方が変わらない墨子庄に手を焼く。この状況の中、張自忠が登場してくる。

これ以後が②になる。やがて、墨子庄との直接対決が始まる。

張自忠 洪副官、彼を呼んでこい。ちょうど彼のところへ行こうとしていたのだ。

墨子庄 （二歩足早に歩み寄り、洪に引き留められる） 蓋枕、また移動するのか？ ワシを放せ！ 戦争で社会がこんなに乱れ荒れきっているではないか。ワシを放してくれ、もし家に帰ることができたなら、永遠にお前に感謝する！ もうワシを連れて行かないでくれ。ワシはもう歩けない！ 途中で弾に当たりでもしたら、棺桶さえも準備することができない。放してくれ！ ワシはするべきではなかった。善し悪しも分からずお前を説得するべきではなかった。お前の気持ちを読み間違えたのだ。ワシが幾つか歳うえだということに免じて、ワシを許して、放してくれ！

張自忠 私を説得に来たですって？ たぶん他の気持ちがあったのではないですか？

墨子庄 ない！ 絶対に他の気持ちはない（註29）。

張自忠は、墨子庄が日本軍に指示され「日本軍と戦う」ことを阻止するためにここに来たのではないかと疑っている。墨子庄が、利益がないことに手を出すはずがないからである。だが、ほのめかされるだけで、この点は最後まで明らかにされることはない。

張自忠は墨子庄に暴行を加えているわけではなし、牢獄に入れているわけでもない。また、日本軍との戦闘に参加させているわけでもない。ただ、墨子庄を自分の軍隊に留めおいて、自分たちの戦いを墨子庄に見せているだけなのである。

この方法に「成果」は現れている。墨子庄はここに居て、張自忠が、自分が想像した将軍とはまるで違っていると感じている。これほど自分の命を顧みず、徹底的に日本軍と戦う将軍を見たことがないのである。この張自忠の態度こそが、墨子庄がここから逃げ出したいと思う大きな理由になっていると考えられるのではないか。この態度から考えれば、日本軍が中国に居続ける限りずっと張自忠は戦いを止めることはないだろう。墨子庄にもこれが分かった。だから、墨子庄は懇願しているのである。

墨子庄のこの懇願を受けるか。だが、このままであれば、受け入れた途端、墨子庄は長い舌を出し喜んでこの軍隊から去って行くかもしれない。墨子庄がこうではないという保証がまだどこにもない。

張自忠 ……（略）……今あなたは分かってくれましたね、どうして我々が抗戦をする必要があるのかってことを？

墨子庄 分かった。悟ったぞ。

張自忠 じゃ、ちょっと聞かせてください。

墨子庄 （媚びを含んだ笑いをして）分かったんだ。時代が変わったのだ。だから、名誉や利益を求める方法が以前といくらか違っている。以前は、完全に柔で剛を制し、巧妙さで勝ち抜いたものだ。現在は違う。剛性を持つ必要がある。抗戦をちょっと叫び、ちょっと戦う、これがとてもハイカラなのだ。蓋世、お前は賢い、もうすぐ五十歳になるが、頭の回転が速く、新しいやり方に追いつき、すぐ理解してしまった。ワシより優れている。いやはや、感心するよ。全く感心する。

張自忠 これがあなたの悟りですか？

墨子庄 臨沂で、お前が殺しまくるのを見た。まるで猛虎のようだった。命も顧みずに戦っていた。その時は、ワシはまだ分かってなかった。でも今分かって来た。賭博と同じで、お前こそが大金を賭けていた

んだ。だから、どうだ、すでに功績を称えられ、名声を高めているではないか。

張自忠 我々が命がけで戦ったのは、名誉とか利益のためだというのですか？

墨子庄 だったら、何のために……(註30)

張自忠とのやりとりから、墨子庄は、張自忠が実行する「抗戦」の意義が全く分かっていないことが明らかになっている。

墨子庄が知っていた将軍たちは「名誉」や「利益」を第一にして、戦いの勝敗はどうでもよいとしていた。墨子庄には、張自忠のように、国のために、日本軍に、猛虎のように激しく、命がけで、正面から戦いを挑む人物がいるなどということが信じられないのである。だから、そのような「戦い」をするのには、どこかに必ず裏があると考える。それが「名誉」とか「利益」ということになる。そうではなく、国のために戦うなどということは、墨子庄にはどうしても理解できないのである。

墨子庄はそろそろ抗戦の意義を理解できるのではないか。だが、話を聞いてみると、この期待は裏切られる。でも今度こそはと期待する。だが、また裏切られる。彼から返ってくる答えはいつも抗戦の意義を外している。この繰り返しに、笑いさえ生じるだろう。

張自忠 ……（略）……私はこの道理を分からせたいのだ！あなたの息子を国家に差し出さない！あなたの息子が前線にいれば、あなたは何が抗戦か分かるだろう。

墨子庄 （独り言みたいに）ああ、何てひどいヤツだ。なにかというと、いつもこの一言だ。（張に向かって）これは合法ではない！ワシの金、ワシの息子、ワシの命は、みんなワシのものだ。誰にも干渉できない。

張自忠 合法でない、ですって？いかなる法律もあなたを懲らしめられないでしょう。もしできるとすれば、ただ私のこの方法

だけです^(註31)。

墨子庄に張自忠の「道理」分からせるためにはどうすればいいのか。

このための張自忠の方法が「息子を国家に差し出せ」ということである。「息子が前線にいれば抗戦の意味が分かる」と張自忠は言う。

張自忠は、墨子庄が国家のために働く人間になったという証拠がなければ、墨子庄をこの軍隊から出す気はない。この証拠が、墨子庄の息子を張自忠の軍隊に入れるということあるということになる。

どういうことなのか。

それは、その人にとって最も大切な息子を軍隊に入れることが当然であるという考えに到達した、ということである。軍隊に入れば、自分の息子が中国のために戦い、死ぬかもしれない、それでも良い、いやそれは寧ろ当然のことだ、という気持ちになったのである。こう考えられるということは、張自忠たちが日本軍との戦いに命を懸けて戦うことに大きな意味があることを理解したのであり、更に言えば、自分も日本軍との戦いで死んでも悔いはないという境地に達したということである。

張自忠は、墨子庄がこの考えに到達することを期待していた。

もし墨子庄がこのような境地に達することができたなら、軍隊の中に居ようが、或いは外に居ようが、自分の息子が軍隊に入っていようが、いまいが、それは関係ない。何処に居ていても、何らかの形で、国家のために働いてくれるはずだと、張自忠は踏んでいる、と解釈したい。

だが、もし、墨子庄がこのことを理解できなければ、結果はどうなるのか。

墨子庄 お前はひどいやツだ。お前に頭をおかしくされてしまった！ワシは何を言ったんだっけ？何も言わない。何も！フン、どのみちお前はワシの息子を捉まえられない。ワシの金もやはりワシの息子のもの

だ。（発狂する）ハハハハ！（山の上に向かって歩き、躓いて倒れる）

張自忠 洪副官、彼を連れて行きなさい。

墨子庄 （洪に引っ張られる）ハハ、金はワシの息子のものだ。ハハ、良い大砲だ、撃て！（洪に引っ張られてゆく）

張自忠 滑稽でもあり、憎たらしくもある。

尤師長 私は本当に一発で彼を殺したいと思いますよ^(註32)。

墨子庄は、とうとう、発狂した。

墨子庄が張自忠の要求に対応できなかった。張自忠は、墨子庄が知っている将軍とは全く違っていた。張自忠はどんな状況の中でも一貫して日本軍と戦う。しかも、問題ありと見れば、墨子庄の常識や法律から考えられないような処置も断固として取る。

一方、墨子庄は「死の恐怖」に苦しむ。常に日本軍と戦っている張自忠の軍隊にいたことが怖くて堪らない。このままだと、ずっと張自忠と関わって行かねばならないし、ずっと死の恐怖を味わい続けなければならない。

最後は、「死を恐れない」張自忠将軍と「死の恐怖に震える」墨子庄のどちらが日本軍の猛烈的な攻撃に耐えられたか、という勝負だった、と解釈しておく。この結果、墨子庄は発狂したのである。

八

今回、この小論では、墨子庄という人物が登場する部分を中心に考えてきた。最後に、この話劇に墨子庄という登場人物を出すことで、作者は何を描き、何を主張したかったのか。このことに対する筆者の見解を述べて、この小論を閉じたい。

この劇で、作者の主張が民衆の「抗戦」への参加であることは、もう改めていうまでもなろう。この点からいえば、日本軍と戦うべきではないと主張している墨子庄が、観客の、最も

憎む相手となるように設定されている。

だが、この墨子庄のような人物たちに限って、退治しようとしても、往々にして、世間の非難や法律のようなものでは、どうすることもできない。世間の非難は意に介しないし、法律は網の目を上手にかいくぐってしまうだろう。作者は、フィクションと言っているが、実は中国社会にこのような人物がいることを知っており、これを墨子庄に描き出していると考えすることはできないだろうか。

そうであれば、どうすれば、このような人物を退治することができるか。

張自忠の方法は、墨子庄を自分の軍隊に留め、自分たちの戦いを見せるというものだった。この方法でも、墨子庄は、なかなか抗戦の意義を理解できなかった。そこで、さらに、張自忠は、墨子庄の息子を自分の軍隊に入れるように要求する。それでも、墨子庄は、張自忠の真の意図を理解できず、これにも応じなかった。たとえそうでも、張自忠は、墨子庄が抗戦の意義を完全に理解したという確証がない限り、絶対に墨子庄を解き放つことはない。張自忠の断固たる態度に、墨子庄に逃れる術は全くないのである。

ここに、作者の、墨子庄に対する強い憎しみと、「抗戦」に対する強い支持が潜んでいるのである。張自忠の、墨子庄を許さず、どうしても「抗戦」に向かわせようとする態度は、まさに観客の気持ちを「抗戦」に向かわせようとする作者の態度と重なっていると考ええる。

また、作者が、張自忠が法律や人権を無視しても、なお墨子庄を拘束するという展開を用いている。これは、この作者の、墨子庄のような人物への強烈的な憎しみと、「抗戦」の支持とおおに関係があるだろう。いくらか強引と思われる危険をも敢えて冒しているのである。もし、この劇の創作が、このような「戦争」の時期でなく、「抗戦」が絡まないのであれば、墨子庄が最後に勝利する物語で終わっていた可能性もあるのではないか。

おわりに

今回は、墨子庄の登場する部分をどう解釈するかが、この話劇の理解の要であると考えた。この考察の結果、この作品はもともと張自忠を称賛するという目的を持っているが、これのみならず、作者は、この作品で、日本軍への抵抗の戦いという状況の中で、その戦いと一線を画している人々の「非」を暴き、この劇の観客の気持ちを抗戦に向けようとする試みも行っていることが分かった。

今回はできる限り作者の創作意図に近いと思われる方向から、この劇を分析した。この結果、この作品における成果のようなものは把握できたのではないかと思う。

ただ、この劇は、どうしても主人公の張自忠の、軍隊内での権力が絶対であるが故に、張自忠が墨子庄に断固たる態度を取るとき、弱いもの虐めのような雰囲気が生じてしまう危険性を孕んでいる。この危険性はちゃんと克服されているだろうか。また、ここに絡んで来るのが、張自忠の「偉大さ」と墨子庄の「憎らしさ」の表現であると考ええる。特に、墨子庄が登場する場面では、それらの表現の面だけでなく、その他の様々な理由で張自忠の「偉大さ」を理解できない観客には、作者の正確な「真意」が伝わらないことも考えられる。

もしこうなってしまったら、作品は「失敗」となってしまうかもしれない。

まだ、考えなければいけないこともある。今回は言及しなかったが、墨子庄と対照的な人物もこの作品に登場している。まだ他に登場人物もたくさんいる。このようなことは、今後の課題としておきたい。

老舎は、重慶で、まだ多くの話劇を作っている。これらも、これらの作品をさらにひとつひとつ考えて行き、そして最終的に、話劇創作の全体の流れを整理しなければならないと考えている。その時に、もう一度この作品も振り返ることになると思う。(完)

注

この論文のテキストは『老舍全集 9』（人民文学出版社・1999）を使用した。従って、この「注」に付すテキストのページ番号は、『老舍全集 9』のものである。今回ここで取り上げた『張自忠』は他に『老舍文集第十卷』（人民文学出版社・1982）或いは『老舍劇作全集 1』（中国戯劇出版社・1986）にも収録されている。なお、『張自忠』は、1940 年夏老舍が三ヶ月かけて執筆し、翌年 1 月『中蘇文化』に発表した後、同月、華中図書公司から出版された。（『日中戦期 老舍と文芸界統一戦線 大後方の政治の渦の中の非政治』や『老舍劇作全集 1』を参照）

- (1) 筆者は『残霧』を「老舍『残霧』試論」（八戸工業大学紀要 25 巻・2006）で、『国家至上』を「老舍『国家至上』試論」（八戸工業大学紀要 26 巻・2007）で述べたことがある。
- (2) （注 1）を参照。
- (3) 『残霧』は中国全国文芸協会抗敵協会の友人の勧めによるもので、『国家至上』は回族救国協会の依頼によるものであると、作者自身が述べている。（注 1）参照。
- (4) 老舍著「閑話我的七箇話劇」で「張自忠將軍が殉国した後、軍界の友人が私に『張自忠』を書くように頼んだ」と述べている。（『老舍論劇』（中国戯劇出版社・1981）
- (5) これらの戦いについては、この作品でも述べられている。これを「臨沂の勝利」「台兒荘の大勝利」と呼んでいる。また、張自忠は「徐州会戦」では「撤退援護」を務めた。
- (6) 「1940 年 5 月、日本軍は湖北省の漢水の東岸を攻撃した。このとき、第 33 集団軍總司令官で上將だった父は、一部の部隊を率いて日本軍を遮断攻撃しようとした。しかし、十里長山の南瓜店で重囲に陥った。父は繰り返し突撃し、7 発の弾丸を受けて、壮烈な犠牲となった。」（『抗日戦争に殉じた父、張自忠將軍』・張廉雲 元北京市政治協商會議副主席・『人民中国』<http://www.peoplechina.com.cn/maindoc/html/200508/teji-2.htm>）
- (7) （注 1）の拙論「老舍『残霧』試論」（八戸工業大学紀要 25 巻・2006）を参照。
- (8) （注 1）の拙論「老舍『国家至上』試論」（八戸工業大学紀要 26 巻・2007）を参照。
- (9) 『老舍全集 9』p.203。もともとこの文章は 1940 年 9 月 10 日『文芸月刊』（戦時特刊第 5 巻第 1 期）に掲載され、後に『張自忠』（華中図書公司 1941 年初版）に収められたものである。（『老舍年譜・上冊』（張桂興編撰・上海文芸出版社）p.328）
- (10) 『張自忠』p.204
- (11) 同上
- (12) 老舍著「閑話我的七箇話劇」で「今回、私はとても大きなエネルギーを使った。全部を五回書き直した。でも巧く書けなかった」と述べている。（『老舍研究資料』（北京十月文芸出版社・1985・p.595）
- (13) 老舍著「三年写作自述」で「私は受けた苦惱、失望についてもう細々と述べたくはない。ただ言うべき事は一言だ。私は失敗した。」と述べている。（『老舍研究資料』（北京十月文芸出版社・1985・p.581）また、「失敗」については『老舍年譜・上冊』（張桂興編撰・上海文芸出版社・p.326）にも同様の文章がある。1940 年 9 月の項にある。「老舍が自ら述べている、『この頃清閑女士はこの脚本を読み終わっていた。彼女は私に又冷水を浴びせた。私は創作するときに感じた困難さを説明した。だが、決して彼女を納得させることはできなかった。』『だが、私はそれでも脚本を手に取り、地面に放り投げる勇氣をもってなかった。少し改めただけで、恥を忍んで、依頼人に渡した。』（『致南泉“文協”諸友書』）と。」
- (14) 『張自忠』p.212
- (15) 『張自忠』pp.212-213
- (16) 張自忠の軍隊が関わったとされる。この事件については次の説明を挙げておく。「廊坊事件は、1937 年 7 月 25 日、軍用電線の修理のため当地に派遣された日本軍部隊が、中国軍に射撃され、両軍の衝突を引き起こした事件。翌日に発生した広安門事件とともに日中全面戦争への伏線となった。廊坊は 北京と天津との間にある。」（『旅して学ぶ中国近現代史 中国近現代史観光ガイド』『抗日戦争』（<http://www.chinatravel-modernhistory.com/jidai/kountid2.html>）
- (17) 『張自忠』p.212
- (18) 『張自忠』p.214
- (19) 『張自忠』pp.218-219
- (20) 『張自忠』p.230
- (21) 『張自忠』pp.230-231
- (22) 「1938 年 3 月頃、日本軍は省都済南も含め、山東省北部を占領していた。北支那派遣軍の第 5 師団（師団長：板垣征四郎）と第 10 師団（師団長：磯谷廉介）は合流、共同で要衝の徐州を攻略することとしていた。これに対して国民党山東省主席の韓復榘は兵力の温存を図り、天險の要害である黄河の防衛線もがら空きにしたり。この結果、津浦鉄道の守備は手薄となっており、情報を察知した磯谷師団は板垣師団との合流を待たずに単独で進軍を開始し、泰安・済寧・滕県と順次攻略していった。戦わずして後退した中国軍の戦意はかなり低く、まともな戦闘にはならなかった。／しかし、他方では板垣師団は国民革命軍の名將張自忠により臨沂で

膠着状態にあり、礮谷部隊との合流に向けた前進が阻まれていたのである。」(傍線は筆者) (「徐州会戦」出典: フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』 (<http://ja.wikipedia.org/wiki/>))

- (23) 「礮谷師団の撤退により、大本営もこの地域に有力な中国軍が存在することを認識し、津浦鉄道全線掌握の大きな障害になることを鑑み、戦線不拡大路線を転換、徐州作戦を展開することとなる。／北から礮谷師団、東から板垣師団に加えて、南からも中支那派遣軍派遣 (3 個師団基幹) を決定。ひたすら「徐州徐州と人馬は進む」といわれた行軍を続け、5 月 20 日に徐州占領を完了、津浦線の打通に成功する。日本軍に三方から囲まれたため、中国軍は数では優勢であったが張自忠部隊以外は全般に戦意が上がらず、撤退というよりは散開に近い有様で逃げ惑い、5 月 19 日には徐州を放棄していたのである。一ヶ月前に台兒荘で日本軍を撃退した同一の部隊とは思えない体たらくである。日本軍

は中国軍に大きな打撃を与えたものの、華北平野の中の街をわずか数師団で完全包囲することは困難であり、数十万の中国兵の包囲環からの脱出を防ぐことには失敗している。／しかし、李宗仁は徐州の維持は放棄したものの、日本軍の南進を阻止することを放棄したわけではなかった。黄河の堤防を決壊させ、決壊地点から東シナ海に至る江蘇省北部周辺を大湿地帯にして日本軍の南進と漢口への進撃を阻止した。戦線はこの後膠着する。」「徐州攻略作戦」(「注 16」と同文献)

- (24) 『張自忠』 p. 233
 (25) 『張自忠』 p. 236
 (26) 『張自忠』 p. 237
 (27) 『張自忠』 p. 237-238
 (28) 『張自忠』 p. 240
 (29) 『張自忠』 p. 245-246
 (30) 『張自忠』 p. 246
 (31) 『張自忠』 pp. 246-247
 (32) 『張自忠』 p. 248